

2009 年度 化学工学特論第一

# 研究・技術・自分のマネジメント

[ 第一回講義配付資料 ]

京都大学大学院工学研究科化学工学専攻

プロセスシステム工学研究室

加納 学

<http://www-pse.cheme.kyoto-u.ac.jp/~kano/>

2009.03.30 初版作成

Copyright © 2009 Manabu Kano. All rights reserved.

無断での複写・配布を禁じます。

## 序論

ようこそ。化学工学特論第一『研究・技術・自分のマネジメント』へ。

本講義で私が目指すのは、受講生が研究者や技術者として成功するための基盤を構築することです。諸君は今後、知識労働者として社会貢献していきます。したがって、知識が不可欠であることは疑う余地もありません。大いに勉強に励んで下さい。しかし、知識を与えることが本講義の目的ではありません。大学教員としての私が為すべきことが、知識を与えることだとは思っていないからです。

本講義では、論理的に考える力、問題を解決する力、人を説得する力、そして自分自身を律して成果をあげる力をどうすれば身につけられるか、私も含めた参加者全員で考えていきます。講義ではなく、演習や討論が中心となります。力をつけることが目的ですから、みずから積極的に取り組まなければ、講義室に来ても全く意味がありません。講義時間内の演習や討論だけでも十分ではありません。日々の実践を通して、はじめて力をつけることができるのだと思います。

## 講義

講義を始めるに際して、本講義について説明します。以下、シラバスからの抜粋です。

### 講義概要

研究者や技術者としてキャリアを積もうとする学生を対象に、自分自身の能力を高めると共に、研究・技術・自分をマネジメントするための方法論を解説し、演習を通して実践力を養成します。本講義で取り上げるテーマは、論理的思考、問題解決、プレゼンテーション、技術と研究のマネジメント（技術経営）、そして自分自身のマネジメントです。

### 評価方法

受講態度（積極性）およびレポートに基づいて判定します。

### 最終目標

研究者や技術者として成功するための基盤を構築すること。

### 教科書

資料を配付します。

### 予備知識

知識は必要ありませんが、学ぶモチベーションが不可欠です。

### その他

学外の方（起業家やコンサルタント）に講演していただくことも検討します。

## 読書

開講に際して、課題図書を提示します。化学工学特論第一『研究・技術・自分のマネジメント』の開講期間は約3ヶ月です。その期間中に、以下の課題図書から5冊以上を選んで読んで下さい。書評の提出を単位認定の必要条件とします。書評は1冊につき1000字程度で構いません。なるべく同一の著者に偏らないように読むようにしましょう。

### <課題図書>

1. 経営者の条件, P.F.ドラッカー, ダイヤモンド社, 2006
2. プロフェッショナルの条件, P.F.ドラッカー, ダイヤモンド社, 2000
3. ドラッカーの遺言, P.F.ドラッカー, 講談社, 2006  
以上, ドラッカーの著作から最低1冊.
4. 青年の大成一青年は是の如く, 安岡正篤, 致知出版社, 2002
5. 知命と立命一人間学講話, 安岡正篤, プレジデント社, 1991
6. 論語に学ぶ, 安岡正篤, PHP 研究所, 2002  
以上, 安岡正篤の著作から最低1冊.
7. 人を動かす, D. カーネギー, 創元社, 1999
8. 道は開ける, D. カーネギー, 創元社, 1999
9. 話し方入門, D. カーネギー, 創元社, 2000  
以上, カーネギーの著作から最低1冊.
10. 上記の他, 自分が友人・知人に奨める名著や良書, 座右の書から最低1冊.

比較的読みやすく、諸君が読んですぐに役立つことができるであろう本を選択しました。いずれも購入する価値が十分にある本ですが、図書館で借りてもよいでしょう。

元マイクロソフトジャパン社長の成毛眞の言葉を借りれば、本を読まない人はサルです [1]。

**本を読まない人はサルである。**

**一生奴隷のように会社に尽くしてどうするんだ？**

**負け組に転落していく人生でいいのか？**

**庶民と同じことをしていても庶民からは抜け出せない。**

**人と違うことをしろ。本を読んで差を付けろ。**

私はこの価値観を是としませんが、本を読むべきであることは間違いありません。成毛眞は、様々なジャンルの本を同時に読むことを勧めています。通勤中に、トイレで、寝室で、少しの時間を見つけては別々の本を読む。様々なジャンルの本を同時に読むことで、いい発想ができるというわけです。自分の仕事に関係する本、専門分野の本を読むのは当然ですが、それだけでは十分ではありません。もちろん、巷で流行のベストセラーなどを読めと言っているわけではありません。

では、どのような本を読むべきか。それは、雑書ではなく、生涯を通して付き合える良書です。安岡正篤は、人間として自己を錬成するために必要なものは、寸暇を惜しむこと、私淑する師と良い友人を

持つこと、そして愛読書を持つことであると説いています [2].

第一に、寸陰を惜しむということです。

その次に心得べきことは、やはり「良き師・良き友」を持つということでもあります。

平生からおよそ善い物・善い人・真理・善い教・善い書物、何でも善いもの・勝れているもの・尊いものには、できるだけ縁を結んでおくことです。これを勝縁といい、善縁といいます。

良い師友と同時に、人間はどうしても愛読書がなければならない。座右に愛読書を置いておきたいものです。

なるべく精神的価値の高い、人間的真理を豊かに持つておるような書がよい。

ということは、たえず心にわが理想像を持つ、私淑する人物を持つ、生きた哲学を抱くということでもあります。これは、我々が人間として生きてゆく上に最も大切なことです。

現代人の一般的缺陷（けっかん）は、あまりに雑書を読み、雑学になって、愛読書、座右の書、私淑する人を持たない。一様に雑駁・横着になっている。自由だ、民主だということを誤解して、己をもって足れりとして、人に心から学ぼうとしない。これは大成するのに、最も禁物であります。

---

ショウペンハウエルもその著作「読書について」 [3]において、人生は短く、時間と力には限りがあるため、良書を読むためには悪書を読んではならないと説いています。

読書においては、何を読むかと同様に、どのように読むかも重要です。

学生時代には誰でも、教師の手ほどきで難解な本に取り組むものである。だが、自分の読みたいものを読むときや、学校を出てから教養を身に付けようとすれば、頼るものは教師のいない読書だけである。だからこそ、一生の間ずっと学び続け、「発見」し続けるには、いかにして書物を最良の師とするか、それを心得ることが大切なのである。この本は、何よりもまず、そのために書かれたものである。

---

この本とは、「本を読む本」 [4]です。本を読む際には、限られた時間で本の概要を掴むための読書法である点検読書が有力なツールとなります。そのために、序文や目次を活用し、最初と最後に書かれていることを中心に、拾い読みをします。この点検読書を修得すれば、読む価値のある本とそうでない本を見分けられるようになります。その上で、読む価値のある本を読むための読書法が分析読書です。分析読書の規則は以下のようにまとめられています。

## I 分析読書の第一段階

——何についての本であるか見分ける——

- (1) 種類と主題によって本を分類する。
- (2) その本全体が何に関するものかを、できるだけ簡潔に述べる。
- (3) 主要な部分を順序よく関連づけてあげ、その概要を述べる。
- (4) 著者が解決しようとしている問題が何であることを明らかにする。

## II 分析読書の第二段階

——内容を解釈する——

- (5) キーワードを見付け、著者と折り合いをつける。
- (6) 重要な文を見付け、著者の主要な命題を把握する。
- (7) 一連の文の中に著者の論証を見付ける。または、いくつかの文を取り出して、論証を組み立てる。
- (8) 著者が解決した問題はどれで、解決していない問題はどれか、見極める。未解決の問題については、解決に失敗したことを、著者が自覚しているかどうか見定める。

## III 分析読書の第三段階

——知識は伝達されたか——

- (A) 知的エチケットの一般的心得
- (9) 「概略」と「解釈」を終えないうちは、批評にとりかからないこと。
- (10) けんか腰の反論はよくない。
- (11) 批評的な判断を下すには、十分な根拠を挙げて、知識と単なる個人的な意見を、はっきり区別すること。
- (B) 批判に関して特に注意すべき事項
- (12) 著者が知識不足である点を、明らかにすること。
- (13) 著者の知識に誤りがある点を、明らかにすること。
- (14) 著者が論理性に欠ける点を、明らかにすること。
- (15) 著者の分析や説明が不完全である点を、明らかにすること。

この読書法は、学術論文の読み方に大変似ています。むしろ、全く同じものと言っても差し支えないでしょう。私の場合、大量の学術論文を読む中で、このような読書技術を必要に迫られて経験を通して身に付けたわけですが、本書を読んで読書技術を身に付ける方法もあるでしょう。点検読書と分析読書の他、「本を読む本」では、それらの発展形であるシントピカル読書についても説明がなされています。

本を読むべきという話をしてきたわけですが、凄まじい読書家の一人である吉田松陰について触れておきましょう。彼の野山獄読書記によると、下獄した1854年（安政元年）10月24日から年末までに106冊、さらに翌年12月15日に出獄するまでに総数554冊を読破したそうです [5]。出獄後も読書を続け、安政3年には505冊、安政4年には385冊を読み、さらにこの三年間だけで45篇もの著述を完成させたとされています。ちなみに、吉田松陰が野山獄に収監されたのは、ペリー艦隊が二度目に日本に姿を現した際に、下田沖に停泊する米艦にて密出国しようと企て、それが失敗したためです。それか

らわずか数年後、松下村塾の門下生にあてた遺書「留魂録」を残して、吉田松陰は処刑され、三十歳の生涯を終えました。

ただし、本を読むといっても、ただ読んでいるだけではいけません。

**読書とは他人の考えた過程を辿る行為に過ぎず、多読する勤勉な人間は、次第に自分で考える力を失う。**

---

ショウペンハウエルはこのように多読を戒めています [3]。ただ、この指摘については、多読の弊害を心配するほどに本を読めてから改めて考えたらよいでしょう。

大学院在学中、まずは週1冊本を読むことをみずから課してみませんか。吉田松陰は年500冊を読んだわけですから、吉田松陰の10%を目指してみようという提案です。「よし、読んでみよう」と思えた人は、今すぐ「1週間に1冊本を読む」と紙に書いて、自宅でも研究室でも構いませんから、目立つところに張り出して下さい。このやり方でやると「すごいこと」が起きるのです [6]。

**すぐれた読書とは、我々を励まし、どこまでも成長させてくれるものなのである。 [4]**

---

読書こそ、我々に必要なものだと思います。読書をすれば、自分の物事を考えるレベルが上昇することを実感できるでしょう。それまでの自分がいかに浅薄であったかに気付くはずです。

## 現状

諸君は、もう20歳を過ぎました。修士課程を修了すれば、30歳もすぐそこです。

**子曰く、吾れ十有五にして学に志ざす。三十にして立つ。**

---

これは論語の有名な言葉ですが、30歳といえば、吉田松陰が刑死した年でもあります。吉田松陰は30歳になるまでに、松下村塾を拠点に、高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允、山県有朋ら錚々たる人材を育てました。あと10年弱、あなたは何をしようとしていますか。

ちなみに、私は今年40歳になります。論語には、次のような孔子の言葉が書かれています。

**子曰く、年四十にして悪まるるは、其れ終らんのみ。**

---

孔子が言われた、「人間、年の四十にもなって、人から見切りをつけられるようでは、もうお終いである」と [7]。

**子曰く、後生畏るべし。焉ぞ来者の今に如かざるを知らんや。  
四十五にして聞こゆること無くんば、斯れ亦畏るるに足らざるのみ。**

---

孔子が言われた、「後輩・後進というものは大いに畏敬しなければならない。後から来る者がどうして今の先輩に及ばないということがわかろうか。しかし如何に有望な後生でも、四十五になって世間の評

判にならぬようならば、これは畏敬するに足りない」と [7].

なんとも痛烈な言葉です。私も四十となるわけですから、「其れ終らんのみ」と言われるようではどうしようもありません。20代の頃には、自分が「後生」として畏敬される立場だとふんぞり返ってきたものですが、もう、そんな馬鹿なことは言っていられなくなりました。「畏るるに足らざるのみ」と見切られてしまわないようにと、日々を過ごしています。

この機会に、論語からもう一つ紹介しておきましょう。

子曰く、如し周公の才の美有りとも、驕且つ吝ならしめば、其の余は観るに足らざるのみ。

---

孔子が言われた、「たとい周公のような才能の美があっても、人に驕り且つ吝（りんしょく）であったならば、その外のことは観るまでもない」 [7].

驕且つ吝であるということは、つまり徳がないということです。だから徳がないような人間は、外のことがいくらよくできても、論ずるに足りないということになるわけでありませぬ。 [7]

---

これは心に深く刻んでおくべきことでしょう。徳を身に付けるよう精進しなければなりません。安岡正篤は、一貫して徳の重要性を強調しています [2].

大体、人間内容には、本質的要素と属性と二つある。つまり、本質と属性とに分けることができる。

我々の才智・芸能というものは、もともと属性である。どんなに立派であっても、どんなに有効であっても、要するに付属的性質のもので、決して本質ということができない。

人間たることにおいて、何が最も大切であるか。これを無くしたら人間ではなくなる、というものは何か。これはやっぱり徳だ、徳性だ。徳性さえあれば、才智・芸能はいらぬ。否、いらぬのじゃない、徳性があれば、それらしき才智・芸能は必ずできる。

---

## 教育

何よりもまず身につけるべきは、知識ではなく、徳性であるということです。果たして、学校教育は人間として成長する場を提供できているのでしょうか。残念ながら、答えは否でしょう。安岡正篤は日本の教育の失敗を厳しく指摘しています [2].

大学を出た人は偉いというように理解されまして、なるほど大学を出た者は頭も良く才気もありますが、人間の本質的な修行をしていない秀才という人々が沢山卒業

しまして、そういう人々が指導者となって、近代の組織を動かしましたからその支配制度は、諸事にわたってまことにスマートで器用であります。人間として最も大切なことをとり残しております。これは日本の深刻な教育の失敗であります。

諸君のように世間体の良い大学に通う学生には、このことを肝に銘じて欲しいと思います。もちろん、大学だけ、日本だけが問題を抱えているわけではありません [8]。

ボウルズとギンタスが、『アメリカ資本主義と学校教育』のなかで、もっとも力を込めて主張しようとしているのは、アメリカ資本主義という典型的な法人主義体制のなかで、学校制度は、かつてホレーズ・マンがいったような「偉大な平等化装置」という役割を果たさないどころでなく、逆に、法人資本主義体制のもとにおけるヒエラルキー的分業のもつ、非民主的、抑圧的な性向をいっそうつよめるという機能すら果たしているということです。「教育制度は、経済の社会的関係との対応を通じて、経済的不平等を再生産し、人格的発達を歪めるという役割を果たしている」

このような問題を抱えた現代の教育制度ではあるものの、そこで教員が為すべきことは何か。新渡戸稲造はその著作「武士道」 [9]の中で、このことを明確に述べています。

知能ではなく品格が、頭ではなく魂が、骨折って発達させる素材として、教師によって選ばれるとき、教師の職業は聖なる性格をおびる。

理想論にはなりますが、冒頭で「大学教員としての私が為すべきことが、知識を与えることだとは思っていない」と書いたのもこのためです。新渡戸稲造は、日本人特有の高い精神性、日本の道徳思想の源流を武士道に求めました。原著” BUSHIDO: The Soul of Japan” は、日本の道徳思想を正しく外国人に伝えるために書かれたもので、外国人読者が理解しやすいようにとの配慮から、膨大な引用がなされています。その範囲は、聖書を筆頭に、古代ギリシヤ、古代ローマ、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、中国等々の哲学者、思想家、歴史家、詩人等々、実に多岐に渡っています。そのような本だからこそ、世界の心ある人々に強く訴えかけることができたのでしょう。原著を読んだ西欧人が衝撃を受けたことは容易に想像できるのであり、ルーズベルト大統領が友人に何冊も配ったという逸話にも合点がいくわけです。

教育への熱い想いという観点から、吉田松陰の言葉を紹介しましょう。松下村塾にて多くの志士を育てた吉田松陰の教育理念が、「松下村塾の記」にまとめられています [5]。

長門の国は僻地であり、山陽の西端に位置している。そこにおく萩城の東郊にわが松本村はある。人口約一千、士農工商各階級の者が生活している。萩城下はすでに一つの都会をなしているが、そこからは秀でた人物が久しくあらわれていない。しかし、萩城もこのままであるはずはなく、将来大いに顕現するとすれば、それは東の郊外たる松本村から始まるであろう。

私は去年獄を出て、この村の自宅に謹慎していたが、父や兄、また叔父などのすす

めにより、一族これに参集して学問の講究につとめ、松本村を奮発振動させる中心的な役割を果たそうとしているのである。

叔父玉木文之進の起こした家塾は松下村塾の扁額を掲げた。外叔久保五郎左衛門もそれを継いで、村名にちなむこの称を用い、村内の子弟教育にあたっている。その理念は「華夷の弁」を明らかにすることであり、奇傑の人物は、かならずここから排出するであろう。ここにおいて彼らが毛利の伝統的真価を発揮することに貢献し、西端の僻地たる長門国が天下を奮発振動させる根拠地となる日を期して待つべきである。私は罪囚の余にある者だが、さいわい玉木、久保両先生の後を継ぎ、子弟の教育にあたらせてもらうなら、敢えてその目的遂行に献身的努力を払いたいと思う。

「松下村塾の記」を書いたとき、吉田松陰は罪人として幽囚の身でした。それでもなお、このような大志を抱き、教育に情熱を燃やしているわけです。そればかりか、まさに有言実行、日本の歴史を動かす多くの志士を松下村塾から排出したのです。最高学府の末席にて教育に携わる者として、深い衝撃を受けざるをえません。

## 仕事

安岡正篤は、徳の重要性、人間として成長することの重要性を指摘したわけですが、先に述べたように、人間として自己を錬成するために必要なものは三つあると言っています。それは、寸暇を惜しむこと、私淑する師と良い友人を持つこと、そして、愛読書を持つことです。人間としての錬成などというピンと来ないかもしれませんが、SBIホールディングス代表取締役 CEO の北尾吉孝も、人間としての根本を養うために実践すべきこととして、心の糧になるような本を読むこと、自分が私淑できるような師を持つこと、様々な経験や体験を踏まえて自分を練っていくことと言っています。ちなみに、彼が私淑する師は安岡正篤だと述べています。

さらに、北尾吉孝は、人間として成長するために、働くことが大切であると述べています [10]。

一所懸命に働けば、その見返りとして人間的に成長できるのです。これこそ仕事の対価です。それとともに、仕事にはもう1つの対価があります。それは「ご縁」というものです。

人間は仕事を通じて自分自身を磨き、高めていくことができるのです。何があっても動じずに自らの意志を貫き通せるような胆識ができあがるまで、自分を磨いて、成長し続けなくてはなりません。

仕事と人間的な成長を結びつけるのは例外的なことではありません。例えば、稲盛和夫も次のように述べています。

働くことが人間性を深め、人格を高くする。働くことは人間を磨くこと、魂を磨く

ことだ。

---

仕事について、北尾吉孝は次のようにも言っています [10].

好き嫌いで判断している限り、決して自分の望んでいる仕事には巡り会えない。

もし本気で自分の天職を見付けたいという気持ちがあるのなら、まずは与えられた仕事を素直に受け入れることです。そして、熱意と強い意志を持って、一心不乱にそれを続けていく覚悟が必要です。

---

これから就職活動をするであろう諸君には、このような観点から働くことを捉えられるようになっておいて欲しいと思います。

## 時間

冒頭で述べたとおり、力をつけることが本講義の目的ですから、みずから積極的に取り組まなければ、講義室に来てても全く意味がありません。日々の実践を通して、はじめて成果を出す能力を身につけることができるのです。

本講義『研究・技術・自分のマネジメント』の最初の実践として、時間の管理を取り上げます。

時間の大切さを訴える言葉は多くありますが、最もストレートなのは、ベンジャミン・フランクリンの次の言葉でしょう。

時は金なり

---

しかし、私の場合、セネカの言葉 [11]の方が身に染み入ります。

人生は十分に長く、その全体が有効に費やされるならば、最も偉大なことを完成できるほど豊富に与えられている。けれども放蕩や怠惰の中に消えてなくなるとか、どんな良いことのためにも使われないならば、結局最後になって否応なしに気付かされることは、今まで消え去っているとは思わなかった人生が既に過ぎ去っていることである。

自分の金を分けてやりたがる者は見当たらないが、生活となると誰も彼もが、なんと多くの人々に分け与えていることか。財産を守ることはケチであっても、時間を投げ捨てる段になると、食欲であることが唯一の美德である場合なのに、たちまちにして、最大の浪費家と変わる。

---

セネカはローマ帝国皇帝ネロの家庭教師も務めたストア哲学の徒です。

このように大変貴重な時間という資源を、我々はどのように管理したらよいのでしょうか。このことについてみていきましょう。ドラッカーは、成果をあげるために身につけておくべき習慣的な能力が五

つあると言っています [12].

1. 何に自分の時間がとられているかを知ることである。残されたわずかな時間を体系的に管理することである。
2. 外の世界に対する貢献に焦点を合わせることである。仕事ではなく成果に精力を向けることである。「期待されている成果は何か」からスタートすることである。
3. 強みを基盤にすることである。自らの強み、上司、同僚、部下の強みの上に築くことである。それぞれの状況下における強みを中心に据えなければならない。弱みを基盤にしてはならない。すなわちできないことからスタートしてはならない。
4. 優れた仕事が際立った成果をあげる領域に力を集中することである。優先順位を決めそれを守るよう自らを強制することである。最初に行うべきことを行うことである。二番手に回したことは全く行ってはならない。さもなければ何事もなすことはできない。
5. 成果をあげるよう意思決定を行うことである。決定とは、つまるところ手順の問題である。そして、成果をあげる決定は、合意ではなく異なる見解に基づいて行わなければならない。もちろん数多くの決定を手早く行うことは間違いである。必要なものは、ごくわずかの基本的な意思決定である。あれこれの戦術ではなく一つの正しい戦略である。

成果をあげるための習慣的な能力の第一番目が「時間の管理」なのです。では、どのようにすれば時間を管理することができるのか。ここでは、「経営者の条件」 [12]にまとめられたドラッカーの教えに従うことにします。

#### <修得すべき習慣：時間を管理する>

成果をあげる者は仕事からスタートしない。時間からスタートする。計画からもスターとしない。時間が何にとられているかを明らかにすることからスタートする（記録する）。次に時間を管理すべく、時間に対する非生産的な要求を退ける（整理する）。そして最後にそうして得られた自由になる時間を大きくまとめる（まとめる）。

成果の限界を規定するものは最も欠乏した資源である。それが時間である。

知識労働者が成果をあげるための第一歩は、実際の時間の使い方を記録することである。その結果を毎月見ていかなければならない。最低でも年二回ほど、三、四週間記録を取る必要がある。

次にくる一步は体系的な時間の管理である。時間を浪費する非生産的な活動を見つ

け、排除していくことである。そのための方法は三つある。

- 1) する必要の全くない仕事, 何の成果も生まない時間の浪費である仕事を見つけ, 捨てることである。
- 2) 他の人間でもやれることは何かを考えることである。
- 3) 自らがコントロールし, 自らが取り除くことのできる時間浪費の原因を排除することである。人は, 他人の時間まで浪費していることがある。

成果をあげるには自由に使える時間を大きくまとめる必要がある。大きくまとまった時間が必要なこと, 小さな時間は役に立たないことを認識しなければならない。

時間をまとめるための具体的な方法よりも, 時間に対するアプローチのほうがはるかに重要である。ほとんどの人は, 二次的な仕事を後回しにすることによって自由な時間をつくろうとする。しかしそのようなアプローチではたいしたことはできない。そうではなく, まず初めに本当に自由な時間がどれだけあるかを計算しなければならない。次に適当なまとまりの時間を確保しなければならない。そして常に, 生産的でない仕事がこの確保済みの時間を蚕食してはいないかと目を光らせなければならない。仕事を刈り込みすぎるということはほとんど起こりえないことを知らなければならない。

時間の管理は継続的に行わなければならない。継続的に時間の記録をとり, 定期的に仕事の整理をしなければならない。そして自由にできる時間の量を考え, 重要な仕事については締め切りを設定しなければならない。

---

## 宿題

それでは, 記念すべき第一回講義の宿題を示します。

今日から7日間, あなたの実際の時間の使い方を記録して下さい。その上で, 何にどれだけの時間を費やしたかをまとめて下さい。配布する記録用紙を利用してもらっても構いません。

記録は30分単位くらいでよいでしょう。時間の使途として「講義」は不適切です。講義時間内に, 積極的に「知識獲得」したのか, 「睡眠」をとっていただけなのか, しっかり区別して下さい。「通学」も不適切です。ポッドキャストなどを利用して「英語学習」をしたのか, 「読書」をしたのか, ただ「睡眠」をとっただけなのか, しっかり区別して下さい。その上で, 有効に活用した時間と無為に過ごした時間とを峻別し, 自分の時間の使い方を把握して下さい。

次回講義(4/16)の開始時刻前に, 7日間の平均値をまとめた提出用紙を教卓に提出して下さい。

書評については, 7月17日(金)を提出期限とします。レポート表紙に氏名と研究室名を明記し, 5冊分の書評をまとめて, プロセスシステム工学研究室スタッフ室(中西さん)に提出して下さい。

## 予定

大変申し訳ありませんが、4月30日は国際会議（AAPS Workshop, 米国）参加のため休講とします。

## 引用文献

1. 成毛眞. 本は10冊同時に読め!: 三笠書房, 2008.
2. 安岡正篤. 青年の大成一青年は是の如く.: 致知出版社, 2002.
3. ショウペンハウエル. 読書について.: 岩波書店, 1983.
4. M.J.アドラー, C.V.ドーレン. 本を読む本.: 講談社, 1997.
5. 古川薫(全訳注). 吉田松陰・留魂録.: 講談社, 2002.
6. 大橋禅太郎, 倉園佳三. すごいやり方.: 扶桑社, 2004.
7. 安岡正篤. 論語に学ぶ.: PHP 研究所, 2002.
8. 宇沢弘文. 日本の教育を考える.: 岩波書店, 1998.
9. 新渡戸稲造. 武士道.: 教文館, 2000.
10. 北尾吉孝. 何のために働くのか.: 致知出版社, 2007.
11. セネカ. 人生の短さについて.: 岩波書店, 1982.
12. P.F.ドラッカー. 経営者の条件.: ダイヤモンド社, 2006.